
仮面ライダーディアース 新たな破壊者

ホッキョクグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディアース 新たな破壊者

【Nコード】

N6227Y

【作者名】

ホッキョクグマ

【あらすじ】

ディケイドの「破壊による再生」によって失われた世界は復活を果たした。各世界のライダーも門矢士とわかりあい仲間となった。その日々が今は続いていた。しかし、それは表面上の事でしかなかった。新たな「破壊者」による原点世界（オリジナル世界）の崩壊。士達は再び旅に出るがディケイドのせいでは無いと判明。今、新たな破壊者による戦いが幕を開ける。

この作品は一部原作設定は無視しています。以上の事が大丈夫な方は次にお進み下さい。ダメな方はこのページ開かないでおくことを

お勧めします。

ブローグ

ライダー大戦後、ディケイドは失われた世界を元通りに戻すことに成功した。それにより、失われた世界にいた各ライダー達は復活を遂げた。

士Ⅱディケイドは各世界のライダーとの信頼関係を取り戻す。

そして、士達、光写真館一行はもとの世界へと戻った。

しかし、2年後のあくる日、オーロラによって突如紅渡が士の前に姿を現す。そして渡はこう言う。

「あなたのせいで私達の原点世界が崩壊を始めています」

なんと、リイマジの世界の崩壊が収まったと思えば今度は原点世界が崩壊を始めたのだ。

渡の言葉を聞き光写真館一行は再び旅に出る。しかし、どの世界でもディケイドは敵視されるところか、救世主として存在していたのだ。

その後、渡が再びオーロラで士の前に姿を現すと

「間違っていました。ディケイドのせいではないようです。ですが、誰かが世界を破壊しているのです。それは私達にはわかりません」

と言いき残り再び消えたのだった……。

ある世界……。此処にも仮面ライダーは存在した。世界を管理する者として。

この世界に存在する仮面ライダーこそ、原点世界を崩壊に導いていく元凶である……。

その名は、仮面ライダーディアース。世界を終焉に導く者……。

プロローグ（後書き）

グダグダで書いていきます。

この作品は士達で言う空白の2年間をまず一章として書いていきます。

もちろん、第一章は空白の2年間のディアースの世界を書いていきます。

長くなりそうですが、そこはすいません。

第01話 デイアース（前書き）

お待たせしました。デイアースの第1話です。

細かいことは言わないので、どうぞご覧ください

第01話 デイアース

「力さえ．．．．あれば．．．．」

俺と彼女の橋本紗夜夏は一度、わけの分らない怪人に襲われた。俺は一応持っていた野球のバットで紗夜夏を庇ったが、怪人の思いもよらぬ力に負けた。バットはへし折れ、俺自身怪我を負った。怪人も歩み寄り、俺達に最後の攻撃をされそうになった時、中年のおじさん2人が俺の前に立ち怪人をひとまず蹴り飛ばした。

「ケガは無いか？ ここまでよく頑張ったな．．．。後は俺らに任せろ」

そう言つて二人は怪人の方にむくと、腕につけてあつたトランシーバーみたいなのに何かを打ち込んだ。もう1人の男は、携帯に何かを打ち込んだ後、腰につけてあるベルトのサイド部分に差し込んだ。その直後、2人はトランシーバーを使つた人は金色に光を発し、携帯を使つた人は銀色の光を発した。直後、2人は仮面を纏つたライダーに変わった。いわゆる仮面ライダーというもののなか。

2体の仮面ライダーは怪人に向かって駆け出すと、金色の仮面ライダーはソードを構え、銀色の仮面ライダーは拳銃より大きい銃を構えて、攻撃を始めた。あつという間に怪人を追い込むと、トランシーバーと携帯型に何かを打ち込む。金色の仮面ライダーは高く舞い上がり、キックをする。銀色のライダーは銃を構え怪人に砲口を向ける。刹那、光弾が発射され金色のライダーのキックと共に怪人を貫く。爆発が起こった後、2体の仮面ライダーは変身を解き俺らの

方に歩み寄ってくる。

俺は、紗夜夏に肩を貸してもらい立っていた。

「ケガは？ 大丈夫か？」

「あ．．．いえ．．．．．。あの、ありがとうございます」

「俺達もこれが仕事だから．．．」

「じゃあな。気をつけるよ。今みたいな怪人は世界にもたくさんいる。俺らは、その怪人から人々を守るために戦う戦士だ．．．」

それだけ言つと、二人のおじさんは去ってしまった。あつけに取られる俺に紗夜夏はいたわりの声を掛けると、紗夜夏の家に向かっていった。そのまま、手当てをしてもらい紗夜夏の部屋で横になっていた。

「はい。手当てはお終い」

「すまん。ありがとう」

しばしの沈黙の後、希生が口を開く。

「あのライダーは何だったんだろう．．．。金色と銀色のライダー．．．。いるとは思わなかった．．．。仮面ライダーなんて．．．」

「うん．．．。アタシも．．．」

「俺、あの時、マジで力を欲した．．．。紗夜夏を守りたいがために．．．」

「うん．．．」

「でも、俺には力が無かった．．．。力が欲しい．．．」

俺は確かに力を欲した。ただ、友や彼女を守るために．．．。それだけだった．．．。なのに．．．。

それから1年の月日が流れ、二人は中学を卒業した。

希生と紗夜夏、他の主な友達も近場の県立笠置高等学校に進学した。希生も他のメンバーもこの後、高校を卒業して、大学に行つて就職するのが、描いた未来だった。しかし……。

あの時欲した力が今になつて手に入る。

またしても、あの2人のおじさんが希生の前に姿を現す。今日は隣に幼馴染である遠藤翔太がいる。今日は夜ではないため、2人のおじさんの顔がよく見える。前は夜であまり分からなかった。

「久しぶりだね……。福瀬希生君。そして初めまして、遠藤翔太君」

「怪人は現れていないはずです。なのに、なんで僕らの前に現れるんですか？」

「それは、君達を選ばれたからだよ。仮面ライダーディアースの資格者に……」

「えっ……」

希生の脳裏にあの日、欲した力の事が鮮明によみがえる。怪人に負け、ライダーに助けられた。その後、紗夜夏に家で手当てをしてもらつて、確かに力が欲しいと願つた。だけど、今になつて言われてもいきなりすぎる。ましてや、将来像まで描いたが、それが全てムダになる。ライダーになると言う事はすなわち世界の平和を守ること。描いた将来像を大きくかけ離れている。

「君が誰よりも強く力を欲した。そうだろう……？」

1人のおじさんが希生に語りかけるように言う。

「その前に名前……。教えてくれよ」

「それはすまなかった。私は楠木弦次郎。仮面ライダーディアースだ」

「坂巻陵太。仮面ライダーディクリンだ」

楠木という人は温和そうな人に見える。坂巻という人も温和そうな感じだが、顔には無数の傷がある。怪人との戦いで負った傷だろうか……。まあ、いい。それより、仮面ライダーと資格者についての方が先だ。

「仮面ライダーディアースって、金色のライダーですか？」

「そうだよ。覚えていたか……。そのディアースの資格者に君は選ばれたんだよ」

「資格者って……」

「君が私達が戦ってきた怪人達に、唯一民間人で立ち向かった人物だからだよ。そして、君は力を欲した。だから、この変身システムは君を新たな資格者として選んだ」

資格者……。つまり、楠木と名乗る人物は楠木の後を俺に継がせようとするものだ。だが、希生は未だに話に乗る気は無い。今は、力など欲していない。ただ、楽しい生活を送ればそれでいい。そう思っている。

しかし、楠木は話を続ける。希生に追い討ちを掛けるように……。

「君は今の生活がずっと続くと思っているのかな？」

「えっ」

希生の思考回路が一瞬止まった。楠木は希生の思考を読んでいるかのように質問を浴びせてくる。希生は口ごもる。

確かに、一度怪人に襲われれば不安は募る。この希生の人生の中で楽しいが続くわけではない。でも、今はそんな力を手にしたくない。でも・・・いざとなれば必要かも知れない。

希生の中で固まっていた答えが崩れてきた。

楠木はトランシーバーを希生に向けて差し出す。それと同時に坂巻も携帯を遠藤に差し出す。

「これは私達の使っている模造品だ。まずは、これをもっているといい。いざとなれば必要になる」

「でも！」

希生は振り払うように言う。

「もしものときだ。いざ！ という時に力が無いと意味がないだろう？」

「だけど・・・」

「君の人生だ。だが、君に出来ること、君が望むこと。それは君自身が一番知っているはずだ」

楠木と坂巻はそれぞれに変身システムを渡すと、オーロラを使って消えた。希生は握られているトランシーバー型の変身システムに目をやる。

「君に出来ること、君が望むこと。それは君自身が1番知っているか・・・」

「希生、戦うしかないよな・・・」

「だけど・・・。俺は・・・」

「考えるより行動だろ？ 怪人が現れたらやってみようぜ」

翔太は乗り気である。希生はあまり乗り気ではなく、トランシーバーをバックにしまうと、スタスタと行ってしまった。翔太はそれを焦って追っていく。声を掛けるが、希生から反応は無く、ただ、前を向いて歩いているだけだった。

ちょうど、少し大きな橋を通りかかった時、橋の方から希生の名前を呼び走ってくるミニス力をはいた女子が来る。希生はその声に反応して顔を向ける。走ってくるのは希生の彼女である橋本紗夜夏である。彼女は何もためらうことなく、希生に抱きついた後、希生にこう言う。

「今日、一緒に帰ろうって昨日メールしたのに忘れたの!？」

「あつ! ごめん! 忘れてた」

「サイテーだな、希生」

横から翔太が首を突っ込んでくる。翔太は彼女はいない。彼曰く好きな人もいないらしいが、希生の観察上、ある特定の人物に多くの視線が行っていることに気づいている。多分、この人が好きなのだろう。あえて、今は言わないが……。

「ねっ! 部活何に入るか決めた? 明日までに担任に渡さないと部活に入れないよ」

「まあ、入らないでいいか。どうせメンドーだし」

「アタシも、入らない予定だよ」

「なんで？」

「つまらないから……。運動もしたくないし、かといって部屋で作業もしたくないし……」

「じゃあ、とにかく今日は千里ちゃんに会いに行こう!」

「賛成!」

と言う事で3人は行きつけのお店に向かうことにした。ちなみに「千里ちゃん」は希生達行きつけのお店の看板娘である。22歳で大学4年生で、父の幸四郎の手伝いで働いている。とても可愛くて、希生達の憧れでもある存在。千里ちゃんも希生達の事を気に入っていて、希生らがお店に来ると、特別な部屋を用意してくれて、そこでいつも食事や、友達とも集まりの場に使っている。希生達と千里ちゃんの出会いは希生が中学2年のとき、親と千里のお父さんが営む店に食事しにいった時が初めだった。それから、何回か足を運ぶようになって仲良くなった。今ではみんなが「千里ちゃん」と呼ぶくらい仲良くなった。

希生達は、千里ちゃんのお父さんが営む居酒屋「パッパッパ」に入った。厨房にいた千里の父の高城幸四郎が振り向く。

「久しぶりです」

「おお、お前達か！ 今な、千里は出かけていないけど、もうすぐで帰ってくるから。いつもの部屋で待つてな。てか、お前らも高校生になったのか！」

「はい。笠置高校です」

「そうか！ 確か、千里も笠置高校だったな」

「はい。千里ちゃんがよく、笠置高校の話をしましたから」

「そうだな。まっ、ゆっくりしていつてな」

「はい。ありがとうございます」

この会話をみるように、希生と幸四郎も仲がいい。父ぐるみで付き合いがあったので、自然と幸四郎とも話しをしたことがあった。今では、幸四郎さんも希生達を、可愛い子供達として接してくれている。

その後、奥の希生達専用部屋に移動した後、紗夜夏に今日あったことを話した。

「というわけなんだ。それで、これが渡された変身システム」

希生はそう言つて紗夜夏にトランシーバー型の変身システムを渡す。
紗夜夏は不思議そうに見ている。

「力を手に入れたんだ……。じゃあ、これでアタシを守ってね」

紗夜夏が何気なく発した言葉に希生の気持ちは決まった。“守る”。
友達を、彼女を守るために俺は戦う。昔、力を欲した。そして、また、力を欲した。決めたからにはやるしかない。
俺は紗夜夏を“守る”。それしか、出来ない。それ以外に力は使いたくない。だから、必要なときに力を使う。強すぎる力は争いを呼ぶ。

「翔太。俺は決めた。ディアースと契約するよ」

「ああ。頑張ろうな、相棒」

「相棒か……。ああ、そうだな相棒」

紗夜夏が目丸くしてみている中、2人は相棒と呼び合い決意を固めた。ちょうど、その時、部屋の扉が開き、手に焼きそばを持った千里ちゃんが部屋に入ってきた。3人は声をそろえて言う。

「千里ちゃん！」

「いらつしゃい。ゆっくりしていつてね。焼きそば持ってきたけど、他に何か必要かな？」

「じゃあ、とりあえず飲み物を」

「わかったわ。それじゃあ、少し待っててね」

そう言つと部屋を出て飲み物を取りに行つてしまった。希生らは出

された焼きそばを食べ始める。その後、千里ちゃんにもう一度、今日起きたことを話すと、驚いていたが、最後は「頑張つて」と言われた。その日は夜の9時くらいまで、お店にいた後、会計をしようとするが、幸四郎さんが一言、言った。

「お金はいいよ！ 彼女のために使いな」

「あつ・・・いや・・・あ、はい。ありがとうございます」

それだけ言つと店を後にした。店を出た後、翔太は自宅に、希生はこつから近い紗夜夏に家にお邪魔することにして別れた。

紗夜夏の家族とは何回かあっている。紗夜夏の家に泊まったこともあるし、逆に紗夜夏が希生の家に泊まったこともある。今日も、紗夜夏の母は快くOKしてくれて、紗夜夏の家に泊まった。

とりあえず、お風呂に入つて布団に入った。2人は紗夜夏の部屋に布団を並べて寝ている。まあ、何回か経験しているし、緊張する事もない。希生は少しの間、考えて、口を開く。

「俺、あの時は力が欲しかった。でも、今日このライダーシステムを渡されて初めは受け取る気になれなかった」

「うん。知ってる。パッパッパで今日の事話してる希生の顔、暗かったもん」

「ライダーになつて紗夜夏を巻き込むようなことがあったら、昔、力を欲した意味がない」

「うん」

「でも、さつき紗夜夏が、これでアタシを守つて、つて言われたとき、心の中で決心がついた。お前を守りたいって。だから、俺はライダーシステムと契約することにしたんだ」

希生はさつき思つた事を紗夜夏に話す。部屋には2人の枕元にある

一個の淡いオレンジ色の光を放つ小型のヘッドランプしかない。希生は上を見て話す。紗夜夏は希生の方に目をむけ、真剣に話を聞いている。

それから少しの沈黙の後、紗夜夏が口を開く。

「アタシからお願いがあるの」

「なに？ そんな真剣な顔して・・・？」

「無理だけはしないで・・・。アタシ、希生がいなくなったら、何も出来なくなりそうだから・・・」

「ありがとう」

そう言うと、希生は紗夜夏を抱きしめた。

「えっ！」

紗夜夏がそう言うが、希生は手を離さない。そして、希生が目を開け紗夜夏に向かって軽くキスをした後、こう告げる。

「おやすみ・・・」

「うん。おやすみ」

第02話 初変身

昨夜、紗夜夏の家に泊まった希生はまだ起きていない体を動かして朝食を食べる。勿論、紗夜夏の母の手料理だ。数回か紗夜夏の母の料理を食べている。正直、料理が上手だ。それに似たのか紗夜夏も料理はお手の物だ。

朝食を食べ終わると、洗面を終え制服に着替える。校則はほとんどので基本的に制服を着ていれば問題ない。希生は制服を着崩し、Yシャツの中には黒色の髑髏の柄が入ったTシャツを着て、Yシャツのボタンは閉めずにいる。無論、Yシャツなどズボンにはしまっていない。更に、今日からはポケットにトランシーバー型の変身システムを入れておく。

一通りの準備を終え、紗夜夏の部屋で紗夜夏の準備が終わるのを待っている希生は、机に置かれた2ショットの写真に目をやる。この写真は希生が付き合いだして2ヶ月たったくらいの時に遊園地に出かけた時に撮った写真だ。2人とも、まだ中学2年生だった。昔の思い出に浸っていると、部屋のドアが開き、しっかりと制服を着た、紗夜夏が入ってきた。

「ごめんね。髪型がなかなか上手く整わなくて・・・」

「気にすんな。紗夜夏は素でも可愛い」

「えっ」

「それじゃあ、行くか！」

希生はさっき言った言葉を忘れたかのように言うと、1人で玄関に向かった。一人部屋に取り残された紗夜夏も、急いで希生の後を追った。玄関に行くと、靴を履き終えて紗夜夏を待っている希生の姿があった。紗夜夏も急いで靴を履くと、玄関のドアを開けた。

「じゃあ、おばさん。ありがとうございました」

「お母さん。行ってくるね」

「気をつけてねー」

希生は紗夜夏の母に頭を下げた後、すでに行ってしまった紗夜夏を追いかけた。自転車にまたがり、こぎだす。紗夜夏は少し先の信号で止まっていた。追いつくと、2人は会話を始める。まあ、通学中の会話はほとんど、勉強の話になってしまふ。学校では、前日のテレビの話になるが・・・。

途中、遠藤に会って一緒に学校に向かう。紗夜夏や希生の家から学校までは10キロくらいの距離がある。それより遠い場所から通っている生徒もいるが・・・。

やがて、学校の近くにある桜並木の通りを進む。その桜並木が終わると正面に希生の通う、笠置高校がある。校門をくぐり、高校の敷地内の駐輪場に自転車を止めた後、3人でクラスに向かう。3人は席も近いので、席についてからは、テレビの話に移る。

朝読書の時間を知らせる、鐘が鳴り、クラスの生徒は席につき読書が始める。この時間は実に嬉しい。朝から10分間ではあるが、読書が出来る。希生の好きな時間のうちの一つだ。

あつという間に読書の時間が終わり、HRを始めるために担任が教室に入ってくる。

学級委員が「起立、礼、着席」の言うと、担任が話しを始める。特に必要も無い話は受け流していく。無駄な知識は必要ない。

1時間目と2時間目の授業が終わり、10分の休み時間に入る。特に2時間目は希生が入学式の日にした教師の体育の授業だった。希生はこの先生のどこが嫌いかというと、いちいち細かいことに文句を言ってくるのだ。

こないだなんて、先生の指示が分からなく友達に聞いていたら「おしゃべりすんな！」と言われた。友達も何も悪いことはしていないため、先生に説明しに言ったが「言い訳するな！」と言われて再び怒られた。

「はあー、あいつの顔みると、吐き気するわ！」

「ほんと！ アイツの言ってること、意味わかんねえし」

愚痴を言いながら廊下を進んでいく。教室の戻った後、次の授業である社会の準備を始める。社会科の先生は温和で、感じのいい先生だ。この先生が希生のクラスの担任なのだが……。個人的にも、希生は社会が好きなのでそこは嬉しい。

そして社会の時間が始まった。歴史の内容は中学校時代にほとんどを独学で学んでので、ノートには独学で書いていなかった内容だけを書いていく。授業が始まって30分くらい経ったところだろうか、いきなり警報がなった。それは不審者を知らせる警報だ。希生は翔太と目を合わせる。

アイコンタクトで確認した後、それぞれが変身システムを身につける。まだ、相手が分からない以上変身は出来ないが、準備をするには問題ない。

そして、警報から少し経ってから放送が入る。

『生徒は教室の入り口に机を並べて不審者が入ってこられないようにしてください。不審者はサングラスをかけてマスクをしています。』

「・・・いや・・・、変身した・・・。怪人だあああああ！」

放送をしていた先生、恐らく教頭だろう・・・。彼がこう叫んだ「怪人」と。希生と翔太はこの言葉を聞いた瞬間、教室を飛び出る。

「おい！ どこにいくんだ！」

「怪人なんでしょ？ なら、俺達がいないと抑えられない！」

希生はそれだけ言うのと階段をジャンプして降りていった。先生は止めようと教室の入り口まで行くが、すでにそこにはいないことを確認すると、教室に残ったほかの生徒に指示を飛ばす。

生徒は先生の指示通り、机を教室の入り口に並べ防護壁を作る。

一方、希生は急いで廊下を走っていた。奥には棒を持った先生がいる。希生は大声で叫ぶと、一人の先生が振り向く。

「君達！ こっちは危険だ！ 早く逃げるんだ！」

「逆だよ！ あんたが危ない！ にげr・・・。」

「逃げる」と言おうとしたがやめた。その先生が吹き飛ばされたからだ。そして、希生達の前に怪人が姿を現す。体を緑色で手は触手みたいになっている。希生はなんだか分からなかったが、とにかく変身システムにコードを打ち込む。

「7、1、1・・・スタンバイ・・・。」

「9、2、3・・・スタンバイ・・・。」

電子音が音を発する。希生は「911」を翔太は「923」のコードを打ち込む。

「変身！」

二人がそう叫ぶ。

『H E N S H I N 』

希生は金色の光に包まれ、黒と金色を基調とした仮面ライダーディアースに。翔太は銀色の光に包まれ、黒と銀色を基調とした仮面ライダーディクリンに変身する。

「どうやってやるか、分からないけど、やるだけやってみつか！」
「手伝ってやるよ！」

2人は構えて、緑色の怪人に襲いかかる。怪人の反応は遅く希生らでも簡単に攻撃することが出来た。ディアースは素手で、ディクリンは専用武器の中型の銃を構えて連射する。

しかし、怪人も反撃無しでやられる程、弱くなかった。緑色がだんだん赤くなっていく。希生もパンチをするが、怪人の体温が異常に熱く触ることができなかった。

「あつっ！！　なんだよコイツ！」

すると、だんだん緑色が落ちていく。それはまるで脱皮するような感じた。やがて怪人は姿を変えサソリのような怪人になる。

「ワームだ！」

翔太が声をあげる。ワームとは仮面ライダーカブトの怪人だ。一体それが何故？　希生は考えるがまとまらないので攻撃を始める。し

かし、パンチがもう少しで当たる、という時に怪人は姿を消した。そして、希生が気がついた時には、ワームの攻撃に当たり体は宙を舞っていた。その後も何回か攻撃された後、2人は地面に落ちた。

「クロックアップか……。翔太、ここはカブト系のライダーに」
「わかった」

希生はトランシーバー型の変身システムを文字盤で「カブト」と文字を打つ。翔太も携帯型の変身システムに「ガタツク」と文字を打つ。「ENTER」ボタンを押す。

そうすると、変身システムの前方に付けられている、赤い飛び出たところから、赤いレーザーが発射される。翔太も同様に携帯型の変身システムのアンテナから赤いレーザーが発射される。

そして、数十秒後、2人の頭上には「カブトゼクター」と「ガタツクゼクター」が飛来した。2人はそれを取り、腰のベルトに装着する。

いつの間にか、ディアース・デクリーンのベルトではなく、カブトのベルトに変わっている。2人はゼクターは、それぞれベルトに装着する。

『h e n s h i n』

電子音が発せられる。希生は仮面ライダーカブトマスクドフォームに。翔太は仮面ライダーガタツクマスクドフォームに変身する。

「キャストオフ」

2人はそう言い、カブトゼクターのホーンを反対側に倒す。ガタツクゼクターは刃の部分を最大限に開く。

『CAST OFF... Change Beetle』
『CAST OFF... Change Stag Beetle』
『e』

2人は重装甲である、マスクドフォームから身軽であるライダーフォームに変身する。カブトとガタックはクロックアップを開始する。敵怪人もクロックアップを開始する。合計3体のライダーと怪人は常人では視認が不可能なクロックアップの世界にはいる。高速で動きまわり怪人に攻撃をする。カブトは素手で、怪人を追い込み、ガタックはガタックカリバーで怪人を切り裂く。やがて、怪人がよれよれになったところで最後の攻撃を試みる。

カブトはスロットを「1・2・3」の順で押し、ゼクターホーンをマスクドフォームの位置に戻す。

ガタックはガタックゼクターにあるボタンを3回押し、ゼクターホーンをマスクドフォームの位置に戻す。

そして、2人で同時に声を発する。

「ライダーキック！」

再び、ゼクターホーンをライダーフォームの位置に戻す。それと同時に電子音が発せられる。

『RIDER KICK』

カブトはゆっくり歩いて怪人に迫る。ガタックは走ってジャンプする。カブトは回し蹴りを、ガタックは跳び回し蹴りをする。タキオン粒子を足に収束し怪人を攻撃する。

怪人は力をなくし、両膝をつくと爆散した。

カブトとガタツクはクロックアップの世界から戻る。常人でも視認できる世界に戻ってきたのだ。先生達はライダーを視認し驚きの表情をあらわす。奥には他の生徒もいる。すると、1人の生徒が声をあげる。

「後ろ！」

二人が反応するよりも早く、首をつかまれた。地面から足が離れて宙に浮いていく。2人は抵抗するが、むなしく何もする事が出来ない。そこで、希生は打開策を思いつく。

「翔太、コイツ、オルフェノクだ。ファイズ系に変身だ！」
「ああ」

翔太が短く応じ、変身システムに文字をそれぞれ打つ。希生は「カイザ」、「翔太は「デルタ」と入力する。「ENTER」ボタンを押し、さっきと同じ場所から赤いレーザーが放たれる。

数秒後、どこからもなくカイザフォンとデルタフォンが2人の手元にそれぞれ現れる。すぐに、それぞれのフォンに入力する。

希生はカイザフォンに「9・1・3」とデルタは音声入力で「3・3・3」と入力をする。

『S t a n d i n g b y 』

電子音が発せられる。その電子音声を聞いた後、カイザフォンをカイザドライバーに装着し、デルタフォンをデルタドライバーと合体させる。

カブトの体を黄色のラインに包まれ、ガタツクは青色のラインに包まれる。その光に驚いてオルフェノクは2体のライダーの首元から手を離す。その隙を見逃さず、オルフェノクとの距離を取る。

『Complete』

電子音声と共に、カブトはカイザに。ガタツクはデルタに変身する。カイザはカイザブレイガンにミッションメモリを挿入し、カイザブレイガンの下部から光刃が姿を現す。

一方、デルタは連結したデルタムーバーを腰から取り出し、銃型の武器を構える。

カイザはブレードを掲げてオルフェノクに斬りかかる。敵も剣を持つ相手なため、こっちの方が戦い易い。デルタはカイザとオルフェノクの距離が少し開いた瞬間に光弾を発射し、カイザを援護する。実に連携の取れた戦い方だ。

カイザはオルフェノクの剣を受け止め、鏑迫り合いを行う。その剣を何とか押し返し間合いを取る。更にカイザを追うオルフェノクをデルタは光弾で牽制しながら、カイザの元に駆け寄る。

「一気に決めるぜ！」

「ああ！」

それだけで分かったのか、カイザはオルフェノクに向かって駆け出す。その間にデルタはオルフェノクの背後に回りこむ。カイザがオルフェノクと再度、鏑迫り合いをしている時に、オルフェノクの背後にデルタに光弾が当たる。

「ナイスだ！」

希生はそう声を出した後、後ろに飛びのき様にカイザフォンの「Enter」ボタンを瞬時に押し、カイザブレイガンから光弾を発射

する。そこ光弾は、オルフェノクをXを模した黄色の粒子で拘束する。

「Check」

『Exceed Charge』

音声で入力する。それと同時にデルタは、デルタムーバー・ポイントモードで相手をロックする。光弾が発射され、相手に当たると同時に三角錐状のポイントをつくり出す。

そして、カイザとデルタは息を合わせ、タイミングよく走り出す。

カイザはカイザブレイガンのブレードモードの必殺技「カイザスラッシュ」を、デルタは三角錐状のポイントに向けて、キックする。吸い込まれるように2人はオルフェノクの体内にはいつていく。そして、同時に、2人は姿を現す。カイザはブレードを振り下ろし、デルタは地面に着地する。それと同時にオルフェノクにはギリシャ文字のΔとXの光が発せられ、砂になって崩れおちた。

しばし、その体勢のまま固まっていた。すると、奥の方から生徒・先生達からの拍手が湧き上がる。それと同時に、生徒達は走ってこっちに向かってくる。

「やばいぞ……。どうする？」

「わからん……」

そうこうしてるうちに、生徒達は希生に来る。装甲を触ったりする者もいるが、大半の生徒は変身を解除するのを待っているようだ……。希生と翔太は顔を見合わせる。いつしか、後ろには先生の姿もある。相当、ヤバイ状況のようだ……。ここで、変身を解除すれ

ば誰がライダーだかばれてしまう。今は、そんな事は避けたい。しかし、生徒からは変身解除を促す声が上がっている。

「ねえ、誰が変身してんの？」

「さつき、希生と翔太っていう人が教室出てったから、その2人じゃない？」

「私は、全然違う人だと思うよ。警察官とか・・・」

「おい！ 変身解けよ！」

希生はこの生意気な口調の3年生と思われる男子に銃口を向ける。たちまち、その男は黙り、他の生徒達も黙る。先生が前に歩み出て、再度変身解除を促す。

「変身を解いてくれないか？」

「わかりました」

2人は、変身を解く。金色と銀色の光にそれぞれ包まれて人間が姿を現す。

「希生！ 翔太！」

「やっぱり！」

「にしてもすごいね！ あんな怪人をやっつけるなんて」

歓喜の声が上がる中、奥から希生の嫌いな体育の教師がこっちに向かってくる。そして、希生の前に立つと、こういい放つ。

「校長室に來い。校長先生が呼んでいる」

第02話 初変身（後書き）

いかがでしょうか？

自分では頑張ったつもりです。特に戦闘シーンなどは、実際に動画で見たりして確認しながら書いていきました。

感想等、よろしく願います。

第03話 校長と2人の教師

希生と翔太は、希生の嫌いな体育教師の後を追ひ、校長室に向かつていた。

希生個人としては、あまり入りたくない部屋だ。校長は入学式の際に、一回見たことがあったがそれ以降は目にしてない。顔つきも怖く、目が少し釣りあがっている。それに、ヤンキーみたいな感じがある、とてもめんどくさそーな校長だ。

その話はさておき、希生と翔太は校長室のドアの前に立っていた。ノックはしたものの、中から返事は来ていない。体育教師は平然とドアの横に立っている。

ついでに言っておこう。体育教師の名前は「山根愚吉」と言う。

少し経ってから、校長室から声が聞える。まさしく、入学式ときの声だ。希生は恐る恐る、ドアを開け、希生にしては畏まった感じで入室した。

窓際に設置されている、机と椅子の場所に、窓かわ外を見ながら声を発している人物を見つけた。

「失礼します。1年5組の福瀬希生です」

「同じく遠藤翔太です」

希生は改めて校長に挨拶をすると、校長は入学式では見せなかった笑顔で希生たちを迎え入れた。サングラスをかけていた目までは分

。からないが、口元は笑っている。不敵な微笑みかもしれないが・・・
ともかく、校長に促されるまま、机の前に配置してあるソファーに腰掛ける。校長もそれに続き反対側のソファーに腰掛ける。

「君達が、生徒やわが学校の職員を救ってくれたと、山根先生から聞いているが・・・」

「恐縮です。私も生徒に危険が及ぶと思ったため、力を持つ者なら助けにいくと考え、今回行動させていただきました」

希生は素直に事情を話す。校長も笑顔でそれを聞いている。再度言うが、目はどうか分らない。

一通りの事情を話した後、数枚の写真を見せられた。それは、希生達の変身したライダーと怪人が戦う姿の一部始終が収められていた。希生はその中の一枚を手にとる。

「これを・・・どこで・・・」

「山根先生がね・・・。君達が戦っている姿を遠くから撮っていたんだよ」

「それで、何をする気なんです？」

校長は少し俯いた後、また希生達に視線を向ける。

「君達を学校のヒーローとしたくてね・・・。この写真を使って、新聞部に記事にしてもらう」

「!!!!」

「そして、君達2人を売り込む。そうすれば、君達は英雄だ。やがて、世界はきみたt・・・」

「やめてください!」

希生は校長の声を制し、ソファアの前にあったテーブルを叩き立ち上がった。

「僕は英雄になりたくて、ライダーになってるわけじゃありません！」

「なら、仕方ないか……。おい、山根、菅野……」
「はっ！」

校長は山根と菅野に命令をする。希生達は、訳が分からず未だに翔太はソファアに、希生は立ち上がったままである。

山根と菅野は、次第にその体の形を変えていく。

『スネーク!!』

山根は手に小型のメモリを持ち、それを自分の前に突き出し、メモリに付いているボタンを押す。そのメモリを首筋に突き刺し、山根の体の形が変わっていく。体色は黒を基調とした、頭は蛇を思わせる形状の怪人に変化する。メモリを使う事から、仮面ライダーWの世界の怪人である、ドーパンドに間違いないだろう。さしずめ「スネーク・ドーパンド」とでも言うべきか……。

「女あああああああ!!」

菅野はそう叫ぶと、体の形を変えていく。体色はピンク系統の色で、体は所々、女のような形状をしている。学年でも菅野を女好きを知らない奴はいないほど、女好きだ。被害にあった女子生徒も多数いる。さしずめ「レディーキラー」とでも言うべきか。欲望があるから、仮面ライダーオースの怪人であるヤミーだ。

希生は「やっぱり」といいそんな顔を浮かべている。今、此处で戦

うべきではない事くらい2人は分かっている。菅野と山根に命令したとなれば、校長も怪人の可能性が高い。下手に動けば、校長や、他の教師も怪人に変化して、こちらが不利になるかもしれない。希生は翔太にシグナルを送る。翔太も分かったと頷き、立ち上がる。怪人を思い切り突き飛ばし、ドアに向かって走り出す。

「翔太、どうする!？」

「わからない。でも、学校から離れないと、他の生徒に・・・」

「ああ・・・。とにかく、お前は先に逃げる! 俺は紗夜夏を助けてから行く!」

「わかった。危なくなったら、変身だ」

希生は頷くと、廊下を左に曲がり、階段を飛び降りて教室に向かった。今は、4時間目で普通だったら授業しているはずだ。希生は一気に教室の駆け込むと、紗夜夏の名前を呼んだ。

「紗夜夏逃げるぞ! 早く! 先生、すみませんが今日は俺と翔太と紗夜夏は早退させてもらいます」

いつまでも動かない紗夜夏の腕を取り、足早に教室を出た。そして変身システムを使い、バイクを呼び出す。時間をおかずに、希生の前にバイクが現れ、それに飛び乗り学校を後にする。今、逃げられる場所に限られている。道路を走りながら、後ろを気にする。途中、菅野のヤミーを発見して、そちらに進路をとる。

「ねえ! なんで、逃げなきゃいけないの!」

紗夜夏は希生の耳元で大声で言う。バイク走行中には大声で話さないと聞えない。

「翔太を救出する。ちょっと付き合ってくれよ！」

希生は一気に速度をあげる。希生はバイクに乗るのは初めてだが、それを感じさせない運転をしている。次にヤミーを見つけた場所は住宅街だった。この近くには紗夜夏の家や「パッパッパ」がある。民間人への被害は極力避けたい。週刊誌に載ったら、それこそ校長の思う壺だ。希生は住宅街の道を猛スピードで走りぬけ、今にもヤミーに捕まりそうな翔太をバイクの後ろに乗せる。

「翔太！ 変身システムを使えばバイクも出すことが出来る！」
「わかった」

普通のバイクなため、2人のり以上やると正直、キツイ。翔太は変身システムを使いバイクを出す。それに飛び移り、翔太と希生は猛スピードで怪人との距離を離す。

やがて、住宅街を抜け、大通りに出る。すでに怪人は追ってきていない。安心してスピードを落とし、普通に走行する。ひとまず、3人は希生の家に向かった。

家の前にバイクを止めると、通常の玄関からは入らずに家の裏の地面にある重い扉を開ける。そして3人はその中に入っていく。

実はここは、希生らが作った地下の秘密基地である。希生達というより、希生の親友である沢井兄弟に頼んで作ってもらったのだが・・・。

基地内には、ある程度の食料の備蓄と沢井兄弟が使う工具場や寝泊りできる小部屋もある。フォーゼに出てくる仮面ライダー部の拠点みたいなものだ。まあ、月には無いが・・・。

そのうちの、リビング的な場所に向かい椅子に腰を下ろす。そして、希生は携帯を取り出し沢井兄弟の弟である「沢井大樹」に電

話す。2コール後に大樹は電話に出た。

<なんだ？ どうした？>

「今すぐにアジトに来てくれないか？ お前に解析して欲しいものがあるんだ」

<面白そうだな。わかった。すぐに行く>

大樹は躊躇い無く了承した。大樹も希生と同じ高校で学年も同じである。今は不登校気味で学校には顔をだしていない。だが、希生とはこまめに連絡をとっており、幼稚園から交流がある。こいつが、今希生達のいるアジトを兄と一緒に完成させた。

数分後、アジトのリビング的な場所に沢井大樹が顔を出した。ラフな格好で現れる。大樹は部屋に入るなり、すぐに本題に入る。

「解析して欲しいものってなんだい？」

「これだ」

希生はそう言つて、ライダー変身システムを沢井に手渡す。沢井は興味深そうに変身システムを見つめる。そして、ボタンを押し始める。何をしているか分からなかったが、やがて、沢井が言葉を発する。

「これはこの世界の技術ではない。コードで解析出来るものがほとんどだが、この機械はどのコードを使っても解析は出来ない。これは実に解析するのに、いい材料だな・・・」

沢井はこの機械がすでに、この世界のモノではないことを証明した。確かに、この世界の物ではない。楠木には何も言われていないが、多分、この世界のモノじゃないことくらい検討はついた。第一、こ

の世界の物なら、既に量産され軍事利用されているはずだ。

希生は沢井にこのシステムを解析を頼んだ後、最後にこう告げる。

「それは仮面ライダーに変身させる道具だ……。俺は、このシステムを解析して他のライダーのライダーシステムを作り、俺達の守りを固めたいと思っている」

それだけ言うと、希生はリビングを出て、外に行ってしまった。

沢井は工具場に入り、システムの解析を始める。最初は、ライダーへ変身させる原理。そうパワーの源。それから、赤いレーザーの秘密を解き始めた。沢井の手にかかれば2日もあれば、全てのシステムの解析が終わる。

問題は、その間、どうやって過ごすかだ。変身システムを持たず学校に姿を現したら、また山根や菅野、その他の先生に狙われる。そうなければ、手を出せるのは翔太しかない。

・・・・・・・・・・・・・・・・

学校に特別会議室では怪人に変化する教師が集められていた。大きなテーブルを囲み数十人の先生が椅子に座っている。中央の椅子には校長が。その左右には山根と菅野の姿がある。そして、校長が立ち上がり、重々しく事態を告げる。

「仮面ライダーが現れてしまった事は、我らにとっては最悪の事態だ……」

「しかし、ただの小童じゃ……。我ら怪人のオルフェノクの力を持ってすれば……」

「だが、この間の戦闘ではファイズ系とカブト系のライダーに変身したではないか……」

「しかも、黒と金のライダーに銀と黒のライダーにも変身している」
「このライダーは見たことないな・・・」
「みなさん！」

色々な意見が飛び交う中、校長の隣に座していた山根が声を出す。彼は立ち上がり、モニターに今日の戦闘のビデオを流し始めた。その中には、ライダーとして戦う二人の生徒の姿が映し出されている。山根が物陰に隠れて撮影したビデオだ。一同は、しばし、そのビデオに見入る。やがて、ビデオは終わりを告げ部屋の照明が全て点く。

「こんな小僧を倒すのは簡単です。ライオトルーパー部隊を出せばそれに、ありったけの怪人を出せば奴らも、体力がきれるだろう・・・。その隙を見て、我らが攻撃を下せば・・・」

言葉の途中、山根は笑い出す。そして、目つきを一瞬にして変えて言う。

「なんとしても我らは倒さねばなりません。暴れだす前に！」

「そうだな・・・」

「ライダーに世界をとられては困る」

「それに、我ら怪人の繁栄も出来るようにな・・・」

「では、これにて会議を終了する。作戦については追って通達する」
「では・・・」

山根と菅野、それに校長は特別会議室を後にする。山根は再び校長と共に校長室に戻ることなく職員室に入った。そして、コンピューターを立ち上げる。そして、ライダーを倒すための作戦を練りだす。彼には確実に勝算があった。午前中の戦闘でおおまかな戦闘データを収集することができた。また、こちらには最強のライオトルーパー部隊がいる。数は1万體。それにプラスして、こちらの先生方の

怪人部隊。オルフェノクである。そして、菅野と彼の最強タッグ（自称）。そして、校長の最強の怪人。いや、怪人ではない。あれはモンスターである。

彼は黙々とパソコンで作戦内容を打っていく。その顔には気持ち悪い笑みがこぼれていた・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・

2日後・・・この間、希生・翔太・紗夜夏・沢井。この4人は外に出ていない。ライダーである2人は筋力トレーニング。紗夜夏は暇つぶしに勉強。そして、沢井はすでに解析を終了し、他のライダーシステムの開発を進めていた。すでに、サソードゼクターの完成は目前だ。あとは、微調整を終え適応者の見つけるだけだ。しかし、そのサソードゼクターの適応者はすでに見つけている。それは、剣で戦えば希生でも勝てない男、人は彼をこう呼ぶ「剣の天才」と・・・。

「希生。ライダーシステム一号が完成したぞ」

沢井からトレーニングルームに電話が入り、希生と翔太はトレーニングルームを駆け出し、沢井のいる工具場に行く。

工具場の台の上には、機械類と並び、基本色が紫色で銀色の刀身が光に当たり反射して輝いている。希生はそのゼクターを手にとり、その出来を見る。そして、希生はディアースの変身システムを使いディアースに変身する。そして、サソードに変身するため赤いレーザーでゼクターを召還する。

そして、沢井の模造品と実際のモノと比べてみる。なにも、変わりはない。希生はディアースの変身を解き、沢井の作った模造品のサ

ソードゼクターで変身する。

「確かに変わりはないな……。いい出来だ!」

「まっ、俺にかかればこんな事なんて簡単だぜ!」

「じゃあ、追加でカイザを。フォトンブラットはピンクに変更して、フォトンブラットの毒性は抜いてくれ……」

「わかった。やってみる」

「すでにデータは獲ったんだろう? あとは、これがなくても大丈夫だろう?」

「ああ。じゃ、俺は新しく開発するよ」

「うん。頼む」

希生は翔太と紗夜夏の顔を見て、言う。

「学校の悪は俺が許さない! 俺が倒してやる」

「そうだな! そうじゃないと、腹の虫が収まらない」

「ホントよ! アタシだって」

「じゃあ、行け! 学校にな!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227y/>

仮面ライダーディアース 新たな破壊者

2011年12月4日21時58分発行